

「宇宙へのいざない —宇宙を学べる大学進学説明会—」 関東版

北 本 俊 二

〈立教大学理学部 〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1〉

e-mail: kitamoto@rikkyo.ac.jp

野 澤 恵

〈茨城大学理学部 〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1〉

e-mail: snozawa@mx.ibaraki.ac.jp

関東版の宇宙を学べる大学進学説明会として、2014年8月30日（土）に立教大学池袋キャンパスで「宇宙へのいざない—宇宙を学べる大学進学説明会—」を開催した。説明会には、17の大学と機関の参加があった。同時開催の講演会には、約180名の参加者があったが、親子連れなどが多かったため、120組程度の参加であろうと思われる。講演会の後に行った大学進学説明にも、多数の高校生、中学生が積極的に参加し、説明会ブースの配置等の改善が必要かと思われた。アンケートは86通回収することができ、その分析から今後の開催方針に対する示唆が得られた。今後のこの会の継続のために、ここに報告を行う。

1. はじめに

これまでの、「宇宙を学べる大学合同進学説明会」関東版の様子は野澤^{1), 2)}に報告されている。それによると、どちらも参加機関は20近くで少なくなく、また、2011年はかなり盛況であったようである。しかしながら、2012年度以降は一般参加者が激減して、関係者間で、存続そのものの可否の議論が起こった。そして、ついに昨年度（2013年度）は、開催することなく過ぎ去ってしまった。しかしながら、昨今のオープンキャンパス等の賑わいを考えると、この種の企画が人気がないはずがない。宣伝をはじめとする運営の問題が大きいと考え、2014年度は、宣伝に力を入れること、アクセスしやすい場所で開催することで、再奮起しようと努力した。

本年度は、まずは、交通アクセスの良い「立教大学池袋キャンパス」で開催した。この開催に関して、当事者である北本は、開催地校が大きな宣伝効果を受け、他大学が不利益を受けるのではないかという心配があった。しかしながら、最終的には17の大学と機関からの参加があり、また、説明会での人の集まり方を見ると、一般的に人気の高い大学に多く集まり、場所の恩恵は、大きな物ではないことが実感できた（良かったのか、悪かったのか、少し複雑ではありますが）。広報は、野澤が「星ナビ」と「朝日新聞」に連絡し、開催案内の掲載をお願いした。どちらも、たいへん快く引き受けていただくことができた。また、後出の「宇宙就活」のメンバーにはツイッターで宣伝していただいた。さらに、立教大学の広報および入学センターに依頼したところ、広報には大学の

HPへ案内を掲載していただき、入学センターには高校教諭の方との面談時にピラを配布していただくことができた。さらに、立教大学でのオープンキャンパスで物理学科のイベントに参加した人には、宣伝のピラを持ち帰ってもらった。私からも、立教高校をはじめとして、個人的に面識のある高等学校の物理の先生方にダイレクトメールで宣伝させていただいた。しかしながら、お願いしたのがすでに高等学校が夏休みである7月下旬であったため、高校の先生から遅すぎる旨のお叱りを受けてしまった。なお、他大学のオープンキャンパスでも宣伝していただくようお願いした。というようなわけで、宣伝はまだ努力の余地はあるものの、それなりに行った。

また、人集めのためには講演会も重要であるとの考えのもとに、人選を考えた。開催地と同じように、講演をしていただく場合、講演者の所属も、大学間の不平等がなるべくないように配慮した。その結果、国立天文台、またはJAXA関係者が最も適任と考え、今年は、国立天文台に相談したところ、幸い「ハワイ観測所所長」の有本先生にお願いすることができた。また、もう一つの講演として、若干異色ではあるが、昨今の高校生、

あるいは保護者の方が心配する「就職」、すなわち、宇宙関係の大学に行くど、どんな職につけるのだろうか？ とか、さらには職があるのだろうか？ という疑問に答える必要があろうと考え、「宇宙就活」として学生時代に活躍し、今は一般企業で社会人として働いている、寺田卓馬さんに生の声として、講演をいただくことにした。宣伝用のポスターを図1に示す。

2. 準 備

2014年3月の学会中に、北本と野澤で相談し、立教大学で開催することを決め、準備を始めた。その後、メールベースで、開催日時、および内容について詰めていき、高校生の夏休み終了少し前がよいのではということで、大雑把な日程を決めた。内容も講演会を前面に出して、参加者が来やすいように配慮した。4月下旬には、これまで参加実績のある大学を中心に、大学側の日程の都合や、参加希望調査を行い、その結果を参考に、8月30日と決定すると同時に、立教大学内の教室の確保を行った。立教大学内で不特定多数の人を集める会合を行う場合は、大学の許可が必要であること、大学に協力をお願いできるようにするため、理学部の共催を受けるよう手続きを進めた。同時に講演会での講師の人選と依頼を行い、スムーズに講演会の形式を整えることができた。7月4日には、実施要領をまとめ、参加予定大学に配布した。

参加大学の募集には、少し時間がかかった。募集直後に参加表明があった大学もあったが、すぐには多くは集まらなかった。何度か依頼を行うこと、TENNETに開催連絡をすることで、徐々に参加大学も増えた。また、宇宙就活からもブースを出したいという依頼があり、最終的には17の大学と機関のブースを出すことができた。なお、今回は、ポスターだけあるいはパンフレットだけの参加もお認めしたので、2校はポスター+パンフレットだけ、1校はパンフレットだけの参加であった。参加大学の募集とともに、各大学に一言



図1 宣伝ポスター。

紹介文の作成を依頼し、一言紹介文とwebページのアドレスを書いたピラを作った。これまで、各大学の5分程度の口頭説明を行ったこともあったが、今回はこのピラでそれに代えることにした。

今回の準備中に、大きなハプニングがあった。それは、朝日新聞社からの突然の電話であった。今年の夏は、幕張で「宇宙博2014」が行われていた。この「宇宙博2014」は朝日新聞社等が主催であった。電話は「宇宙博2014」のチケットを参加者に配布して欲しい、という依頼であった。参加者にはたいへんありがたいプレゼントとなるので、是非ということでチケットをいただき、当日の参加者に配布させていただいた。

準備には、メールのやり取りや、配布ピラの作成等の面倒はあるものの、そんなにたいへんでもないので、学生には特段の手伝いを頼まなかった。当日の手伝いをボランティアでお願いするだけとした。

3. 当日の動き

実施直前の数日間の動きを表1にまとめた。これは実施要領で予定したとおりで、滞りなく実施できた。

参加した大学は最終的にアイウエオ順に、会津大学、青山学院大学（ポスター、パンフレット）、茨城大学、桜美林大学、工学院大学、国際基督教大学（ポスター、パンフレット）、国立天文台（総合研究大学院大学）、芝浦工業大学（パンフレット）、上越教育大学、千葉大学、筑波大学、東京工業大学、東京理科大学、明星大学、立教大学、早稲田大学、の16大学であった。また、宇宙就活からの出展があった。

4. 講演会と個別相談会

講演会は2講演とも30分と短めであったが、後述のアンケートによると、聴く側としては、ちょうどよかったようだ。各講演終了後に質問時間を設けたが、質問は多くて、途中で打ち切る必要があった。講演の内容も、前半は宇宙科学の内容、

表1 準備の流れ.

8月25日	一言紹介文の受付終了. まとめて印刷確認
8月28日	ポスター, パンフレット輸送品受付終了
8月29日	学内案内ポスターと地図案内の印刷 ブース番号表作成, 配布物準備
8月30日	
10:00	教室の設営, ブース, 資料置き場作り 受付作成 (1カ所)
11:00	各大学はブースの準備, 講演準備
13:00	開場, 受付開始
第1部	講演会: 4402教室
13:30	開会挨拶
13:35	「宇宙からの便り一光のすばると闇のアルマー最新宇宙の研究事情」有本信雄
14:05	「宇宙と隣り合わせの大学生活と進路選択」 寺田卓馬
第2部	大学進学説明会: 4403/4404教室
14:50	各大学の個別相談
16:30	開会



図2 講演会の風景.



図3 ポスター会場の様子. これは、開始前に撮影したもので、説明会時はたくさんの人であふれていた。

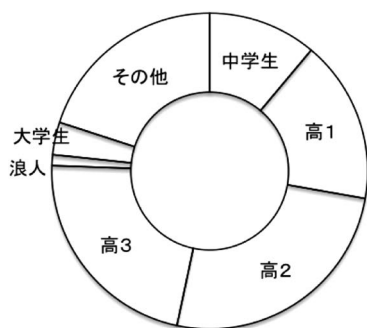


図4 参加者の学年分布.

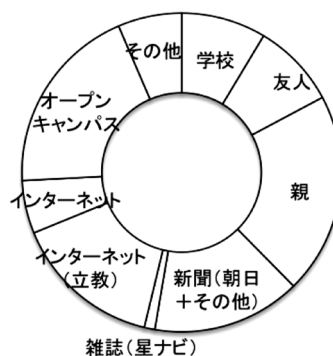


図5 本会の存在を知った情報源.

後半は大学での宇宙の研究と将来の就職あるいはキャリアを考える講演であったので、聴く側も飽きなかったと思われる。講演の様子を図2に示す。

講演会終了後は、別部屋に設けたポスターとブースで、個別相談とした。ブースといっても、机を並べただけで、隣同士に仕切も設けなかった。ポスター会場のブースの様子を図3に示す。そのため、開始直後は、人気のある大学に行列ができ、その行列をうまく整理することができず、たくさん待たされた人も多くあったと思われる。この点は工夫の余地が多く残されている。しかしながら、時間が経つにつれて人数も減り、終了予定時間頃には、スムーズに終了することができた。

5. アンケート結果

アンケートは、参加者全員に渡したが、親子連れも多かったし、全員から回収したわけでもない。結果的に86部のアンケートを回収することができた。講演会に関する項目によると、講演時間はちょうどよかったという回答が71/79、70/81であった。また、有本先生の話はわかりやすかったが48/76、難しかったが28/76で、科学の講演としてちょうどよかったと思われる。寺田さんの話では、役に立ったというのが71/76で、たいへん関心が高かったことがうかがえる。

図4に参加者の学年分布を示した。予想どおり、高2が最も多く、高3、高1がそれに続く。しかしながら中学生も1割程度参加していること

は注目すべきである。図5には、本会をどこで知ったかという問いに対する回答分布を示した。結果は、新聞が13/93、また、親が19/93であった。ご両親がどこから情報を得たのか不明であるが、新聞であると思うと、新聞の効果は絶大であったと思われる。また、立教大のHPと、オープンキャンパスでのビラもかなり効いているようである。各大学でも、オープンキャンパスでビラを配ると相当な効果があると思われる。

6. 次回に向けて

本年度は「宇宙博2014」があったことで、たまたま宇宙に対する関心が高かったのかもしれないが、それなりに人数を集めることができた。また、時間を例年より短くすることで、より効率化を図った。新聞や、オープンキャンパスでの宣伝が効果を発揮するようである。高校の先生への宣伝のお願いは、夏休み前に行く必要があることも学ぶことができた。今後は、宣伝の行い方などをさらに工夫することで、充実した効率的な会が期待される。

なお、宣伝に協力していただいた、「星ナビ」「朝日新聞」、また「宇宙博2014」のチケットをいただいた朝日新聞社にはこの場をお借りして、御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 野澤 恵, 他, 2012, 天文月報105, 281
- 2) 野澤 恵, 2013, 天文月報106, 274